

## Product KAZUYA

### 「ムスタークアタ東稜～シブリン北壁新ルート 2005年の記録」

私は、これまでに何回かの海外登山を実践してきたが、05年にやっとスタート地点に立てたと思っている。学生時代にチャンスを逃すまいと、登山隊に加わりがむしゃらにヒマラヤの山頂を目指した時から始まり、8千mの酸素を吸いたいとの思いから無謀にも2人だけで臨む。その後、自ら登山隊を組織できるようにという思いから、先輩の登山隊に参加し勉強させてもらったこと。登山隊長として登山を遂行する難しさ、そして充実感を得た04年。ここに至るのには成功や失敗、そして挫折があった。そして更に次の階段に上がる為のチャレンジが始まった。

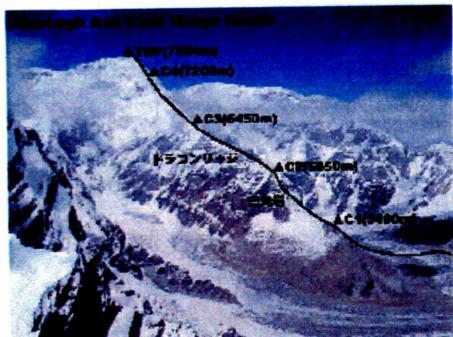
#### [ムスタークアタ東稜]

##### 【なぜこの山を登るのか？】

05年最大の目標はインドのシブリンであったが、6千mでの困難な登山を快適に進めるには、その前に順応をしっかりしておかなければならぬと考えていた。トレーニングできる山を選定するには以下の条件がクリアできていなければならなかった。①シブリンの標高(6,543m)より高い場所まで登れること、②何と言っても登山費用が安く登れるところ、③8月から9月ぐらいに天候の安定している場所、と尽きないが、一番大切なのは何か新しいチャレンジのテーマが入っていることが重要だった。結果、7千m峰のアルパインスタイルと、ヒマラヤでの縦走の挑戦ができるムスタークアタの東稜に決まった。

##### 【東稜からの登頂】

登山中は様々な困難の連続だが、直面したとき持っている技術を駆使して克服していくのが私はとても好きである。この東稜は中に入ってしまうと、先が見ることができないので不安でもあったが、逆に毎日が新鮮で新しい発見の連続だった。



1日目、いよいよアイゼンにピッケルの完全装備になり、稜線に突き上げている側壁のルンゼをダブルアックスで駆け上がつて行く。所々に硬い氷が露出しており確保し合いながら慎重に。この日は稜線上の平らな場所にキャンプ1を設営する。上部にルート上の核心部である三角岩が目の前にあるが、雲が視界をさえぎっている。

2日目、夜中から降り出した雪が多少残っていたので出発を遅らせた。天候は回復しないが、三角岩の基部まで進み判断することにした。ルートは大体2つに絞られたが決めきれず、とりあえずアメリカ隊が登っているだろう右ルートに行くことにしたが、実際登りだしてから左ルートへと転進する。両手に持っているバイルを岩のクラックにねじ込め、右足のアイゼンを岩に、左足で氷に蹴り込みながら三角岩の核心部を切り抜ける。既に順応している体だからこそ動いてくれるが、それでも体のあちこちが悲鳴を上げている。

3日目、ドラゴンリッジという不安定な尾根に突入。雪庇とクレヴァスに注意しながら慎重に進む。周りを見わたすといつの間にか、見上げてきた山々が目線の高さやそれ以下になってきたことに気づき、もう引き返せない所まできていた。そして、そろそろBCスタッフは下山を開始するだろう。もし敗退して引き返すことになろうものなら地獄だ。絶対、頂上に行き西稜側に越えてみせると強く思った。

4日目、疲労も増してきたがそれ以上に辛かったのは空腹だった。軽量化で、一人分の食料を

二人で分け合い、唯一の喜びは夢の中で満腹になることだけだった。頂上岩峰も近くに見えるが、さすがに7千mを越えているので動きもゆっくりで思うように進まない。仕方なく7,200mに最終キャンプを急な斜面を崩して作る。遠くにはカラコロムの山々も見え、眼下には登ってきた東稜がきれいに伸び、隣にある北峰はオレンジに染まっていた。

5日目、とても7千mで泊まったとは思えないほど調子が良く、今日こそはと意気込んで出発する。頂上大地に出る3mの雪壁は、バイルも効かない柔らかいオーバーハングで、スノーバー2本を巧みに使い越える。西稜側に出ると強風で顔も凍り付いてしまうくらい寒い。9月5日の15:30に山頂に私たちの納得いくスタイルでの登頂に成功した。そして次なる目標のシブリンが見えてきた。

6日目、西稜側のキャンプ3での寒い一晩を何とか乗り切り、足早に脱出する。各キャンプ地はハイシーズンの面影は全くなく、静まり返っている。6日間のチャレンジは終わりを迎え、山頂を振り返ってみると、希薄な空気と白銀の世界はまるで夢の中での出来事のように感じた。BCからは迎えにきてくれたバイクで砂ぼこりを上げながらこの地を去った。

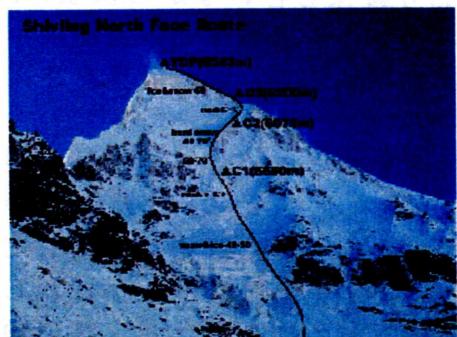
## [シブリン北壁]

### 【なぜこの山を登るのか？】

04年パキスタンのゴールデンピークでの成功を収めての帰国後、次なる目標を探していた。初めは漠然とだったが、インドの山を登ったことも見たこともなかったので行ってみたいなということからスタートした。注目して調べていると、こんな美しくて難しい山にいつかは挑戦してみたいな、と思って見ていたシブリンがあった。しかし、その内に挑戦したいという考えに変わったが、正直自分でも無謀な計画立てているのかなという弱気の狭間で揺れ動いていた。しかしさポートナーの谷口に弱気なところを隠して話したところいつの間にか行くことになっていた。正直これまで登頂にこだわりが強かったが、心境の変化としてルートへのこだわりに変わりつつある自分がいた。いい山だけに良いルートから登りたいという欲張りもあったがまた一つの挑戦が始まった。

### 【北壁からの登頂】

初めてシブリンを見たときは怖いと思った。しかし、山のふところで生活していると山と一体化できている気持ちになれ、“シブリンさんこれから登るからよろしく頼むよ”なんて心で会話しているぐらい近づいてきていた。心と体、そして山との共鳴が始まったのだ。



1日目、メルーの山頂がオレンジ色に染まるのを横目にクライミングがスタートした。今日の内に北壁を抜けてしまえるような速度で高度をグングン上げていく。終始アイゼンの前爪での登りにふくらはぎも悲鳴を上げている。追い打ちをかけるように、雪に覆われている岩に突入すると速度が一気に落ちた。いくら順応しているとは言え、この高度での無酸素クライミングは辛く、頭もボーッとしてきて、注意力や怖さが薄れてきている。気合いを入れ直しながらの登りがつづく。

2日目、今日こそは上部三角雪田に入り、あわよくば北西稜までと考え再び氷の世界へ出発。どのくらい登っただろう？何時間ぐらい経っただろう？そんなことはどうでも良くなっている。ただ目の前の堅い氷にバイルを打ち込んでいくだけだ。喉の渇きも境地に達し、アツという間に一日が終わる。テント場は、一人がやっと立てるぐらいの広さしかなかった。結局ハーネスにぶら下がりながら、寒く長い夜を耐えることになった。

3日目、冬眠から覚めたかのようにテントから出ると今日も晴れている。ガチガチになった体を少

しでも解凍したいと、今日こそは陽の当たる北西稜を目指し出発する。直後にある第2の核心部は予想より難しいクライミングが強いられた。岩に付いた雪をはらいながら慎重に進んだこともあり、思いの外時間をとられるが、予定していた懸垂氷河の真横の北西稜に出る。この時、北壁を突破することに満足している自分がいて、山頂に行かなくてもいいやという今までに無い気持ちに包まれたのを鮮明に憶えている。しかし自分たちのルートを完成させようという気持ちから明日の登頂を目指した。4日目、テントを出ると、太陽がシブリンの双耳峰の大きな影を造っていた。言葉少なげに準備をし、山頂を目指し出発すると、山頂に行けば見るよと言われていた、テレイサガールがメルーの背後から顔をのぞかせている。南峰の美しい稜線に見とれながらもグングン高度を上げていくと、念願の頂上に達した(10/12)。ビデオの前でパートナーの谷口は、日本を出る前に“お前には登れないよ”と他人に言われ辛かった胸の中を告白した。そして応援してくれた人たちの為にも安全に下降することを誓った。

5日目、朝コップ一杯の水を作ると燃料が終わった。今日こそはBCに下山して、スタッフに元気な顔を見せ安心させてあげたいと強く思っていた。結局、疲労困憊でフラフラ・ヨレヨレ状態で10歩進むと座り込む状態だった。夕方やっとBCの見えるところまで来ると、スタッフがテントの外で待っていてくれているのを見て、全てが終わったと安心しきって倒れ込んだ。

## [2006年の挑戦]

2005の秋、未踏ルートよりヒマラヤの岩壁に向かった。果敢な挑戦の末の成功、しかしその代償として足の指4本を凍傷にて失った平出 和也の次なる挑戦は世界第2位の高峰であるK2



(8611m)から流れ出しているバルトロ氷河を走破する自転車の旅である。約80kmある行程には非日常的な様々な困難が待ち受けていた。まず氷河という一年中溶けることのない氷の上を進むことになる。その氷は生きているかのように毎日違う顔をして時々クレヴァス(巨大な割れ目)を作りだす。そんな中に落ちてしまったらマグロの冷凍庫と同じだ。また何よりゴールの標高が5300mにもなるのだから更に大変。酸素は平地の半分以下で人間はもちろんあらゆる生物が生きていく世界なのだ。そんなことを尻目に私はK2にお買い物に行く気軽な気持ちで最奥の村アスコーレからペダルを漕ぎ出した。

小屋はもちろんレストランもない生活道具の一切を現地のポーターに持つてもらうことになる。25キロもの荷物を持っているので“ポーターさん先に行くから追いかけてきて”と言ったのもつかの間、すぐに急な登りで担ぐことになった私は…こんな鉄クズなんか捨ててやる!と。また氷河に入るパイユまではカンカン照の太陽さんにヤル気と水分が奪われていく拷問だ。その先も氷河の複雑な地形に自転車はザックに付けられ担がれっぱなしになった。しまいにはポーター達からもクレヴァスに自転車を捨てたらとの助言。しかし初心貫徹、男に二言はないと意地になっていた私。ゴレ2付近ではモレーン上を爆走してパンクのパッチ張りも合計20回を越えた。コンコルディアからは正面にK2を見ながら白銀の世界にタイヤのシュプールを刻んだが、さすがに5000mを越えてサイクリングしている自分のバカさ加減が逆に楽しく思えてきた。クライマックスはパキスタンの友人達とK2に祝福されながらの感動のゴールに至った。しかしもう自転車はお腹一杯!帰りの荷物になるので、ここBCでポーターにいかに自転車を売りつけるかで頭がいっぱいだった。ともあれ、世界で初めてで最後のチャレンジだろう。

その後、中国チベットを横断 3500km の旅に出た。途中で聖地カイラスの巡礼をしながら現地に溶け込んだ。



### 【これから】

04年から私は社会に出て山登りをつづけているが、理解ある職場と仲間に支えられ私の活動ができる。私の経験が、私だけでなく皆のものになるように伝えていきたいとも考えている。そしてこれからも挑戦し続けていきたいと考えている。

**平出 和也** 1979年生まれ kazuya79525@yahoo.co.jp  
東海大学山岳部 OB



- 2001年 クーラカンリ (7,381m) 未踏峰\*
- 2001年 チョーオユ (8,201m) 山頂からスキー滑降\*
- 2003年 キンヤンキッシュ (7,852m) 西稜
- 2004年 ゴールデンピーク (7,027m) 新ルート\*
- 2004年 ライラピーク (6200m) 新ルート\*
- 2004年 ドルクンムスターク (6355m) 未踏峰\*
- 2005年 ムスタークアタ (7564m) 東稜\*
- 2005年 シブリン (6543m) 新ルート\*

\*は登頂